愛知教育大学教育実践総合センター紀要
第6号，pp. 77～82（March, 2003）

幼・小連携を探る

― “忍者体育”の実践を中心に ―

村 岡 眞 澄（愛知教育大学 幼児教育講座）

The Study to Investigate the Desirable Relation of Kindergarten and Elementary School

― Focusing on the Contents of Physical Education for the Lower Grades ―

Masumi MURAOKA (Department of Childhood Education, Aichi University of Education)

要約 いわゆる「一年生プロブレム」などをきっかけにして、幼・小連携への実践的取り組みに対する関心が高まっている。より実りある連携を推進するには、従来のようなイベント的な交流に終ることなく、教育内容や指導方法の見直しといったところにも踏み込んでいく必要があると思われる。このような問題意識から、小学校低学年の子どもの発達特性に相応しい教育の内容や指導方法を「体育」を切り口として探ろうとした。幼少年期の子どもにとって、身体活動の持つ意味は大きいからである。運動種目を課題として与えず、「子どもがやりたい」と思い、「やってみよう」と自分で取り組み、多種多様な動きを工夫してつくり出す子ども中心の生き生きとした体育学習を総合的につくろうとしている岩井の「忍者体育」のような実践が追究されるならば、そこに自ずと幼・小連携の道が開かれるであろう。岩井の実践はまた幼児教育の見直しを要請する。幼・小の相互理解をふまえながら、子どもの側からの教育を追究することが小連携の基本となると考える。

Keywords: 幼・小連携、忍者体育、総合的な学習

＜問題の所在＞

「生きる力の育成」というこれからの社会を見通した教育目標との関連において、生活科につながる形で、小学校3年生から高校まで総合的な学習の時間が取り入れられた。このことは、「生活科の成功が今回の総合的学習を生み出した」[1]という見解にもあるように、教師主導の知識詰め込み型の教育ではなく子ども達が頭も体もフルに使い、いわば自己の総体を上げて課題に取り組む主体的な学びへの取り組みが一定の評価を得たことを示しているといえよう。しかし一方で、「学力低下問題」を含め、生活科や総合的な学習に対する批判や危惧が様々な立場や視点から提起されていることも確かである。[2][3]幼・小連携を幼児教育の側から追究する立場からは、「体験学習の重視」「個性化」「気づき」等々の特色は幼児教育とも相通ずるものがあり、問題点を克服する形で今後さらに充実が図られることが望まれる。幼・小連携の課題については、理念や制度的な視点からその経緯を明らかにしたり[4]、あるいは諸外国における幼・小連携の試み、[5][6][7]日本における具体的な実践の紹介等々[8][9]これまでにもすでに多くの研究が蓄積されている。生活科が創設された当時の背景にもまして、いわゆる学級崩壊現象など子どもをめぐる状況は一層深刻化しており、わけても「一年生プロブレム」の発生などにより、今またあらたに幼・小連携問題がクローズアップされているといえよう。尾木らにより、[7]「一年生プロブレム」は高学年の学級崩壊とは質的に異なり、教師への愛着を基盤とした集団の未形成から生じている問題であることが指摘されているにも拘らず、一部の幼稚園や保育園ではいたずらに管理統制的側面を強めたり、小学校教科を先取りするような実践が[10]行われるようになっていることも事実である。幼・小いずれの側からも関心が深められる中で、子ども達にとって望ましい幼・小連携の道が開かれるような制度の改革や実践的努力が求められる。

こうした状況の中で、秋田ら[11]の有馬フィールドにおける3年間の幼・小連携の試みはこれからの幼・小連携のあり方の一つのモデルを示すものとして示唆するものが多い。しかし、これは同じ地域内に幼稚園と小学校があること、校長が園長を兼務するなどの条件下で可能となったと解される部分もあり、多数の学区から子どもが集まっているような幼稚園や保育園ではなかなか難しい。いずれにしても具体的な実践レベルで今後さらに研究が進められる必要があろう。

本研究では幼・小連携のあり方を探る研究の一端として、体育学習を総合的な学習として位置づけて実践を続けてきている岩井の「忍者体育」[12]や、合科的総合的な学習の授業に学びながら、幼・小連携に資する教育内容、指導方法について考察するとともに、得られた知見を保育にフィードバックさせて見直しを図りたいと考える。

幼・小連携は実践レベルでは常に個別的な取り組み

が要求されてくるものであり、一般化することは難しいが、少なくてもこうした研究を積み上げることで実践を進め高める上で有効な示唆が得られると考える。

＜研究方法＞

用いた方法は以下の通りである。

（1）小学校、幼稚園での授業や保育の観察。

（2）インタビュー調査

調査日　平成14年8月19日

場所　奈良女子大文学部附属小学校

被調査者　同上教官　岩井邦夫氏

〈幼・小のつながりへの見通しが感じられた授業〉

（1）生活科、総合的な学習

幼・小のつながりという目的で設置された生活科の授業や総合的な学習の授業をいくつか参観した。理念がどのように実践に現わされているかという関心からである。「郷土の産業」「食料を考える」「探検」「エネルギー」「遊び」「ゴミ問題」など様々なテーマについて、実際に町に出かけたり、グループ学習をしたり、発表し合ったりなど、子ども達はとても伸び伸びと楽しそうに取り組んでいた。学んだことを発表するという面では、視聴覚機器やコンピューターの利用、あるいは冊子にまとめたり、劇で表現するなど、子どもの主体的能動的な関わりの中で、学びを共同化し、より確かなものにしようとするねらいが十分達成されていたように思われる。

国立大学附属N小学校の２年生の「遊び」への取り組みでは、テーマが「遊び」であることにも驚いたが、担任の先生のしなやかで遊び心溢れた指導に、幼児教育から小学校への滑らかなつながりの可能性が感じられた。色々問題点も指摘されているが、幼児教育の側からすれば、とりわけ小学校の低学年においては授業が体験的学習を中心としてさらに総合化されていくことが望まれる。そのためには環境的な条件整備や教師自身の意識の変革等々、解決されなければならない課題は多いといえよう。

（2）きのくに子どもの村学園小学校の実践

堀がつくった「きのくに子どもの村学園小学校」では[13]徹底した少人数教育ということもあり、１年生から６年生までの縦割編成で、プロジェクトを中心とした教育がおこなわれている。例えば「工務店」のプロジェクトは、実際に立派な温室や小屋を作ってしまうのである。算数や理科を始めとした様々な教科の基礎知識、木材の準備、鋸で木を切る、釘を打つ、壁を塗る等どれもこれも相当高度な技能が必要である。それまでに学んだ知識や技能で間に合わないとき、アドバイザー（ここでは先生と呼ばない）や地域の専門家の力を借りるのである。作った小屋では喫茶店が経営されたりする。また学びの軌跡を子ども達は自ら冊子にまとめ見学者に販売する。図１は筆者が冊子を購入した際にもらった領収書である。これらの収益は教材費の重要な資源となるので子ども達は真剣である。教科の学習だけではとても追いつかない身体知、生活知が要求される。このような総合的な学習を通して、自由で柔軟な発想やそして何にもまして生活や学びを自分たちのものにしている自信や確かさが育てられている。「きのくに」のプロジェクトでは各教科における基礎的な知識を学習することがなぜ必要なのかが子ども達にきちんと認識されているので、学ぶことが子ども達のものになっているのである。

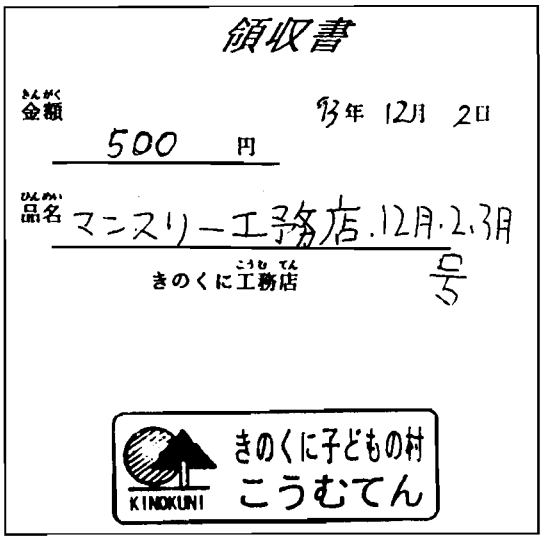

図１　きのくに工務店の領収書

（3）忍者の体育の実践

１）岩井の体育に対する基本的な考え方

〈総合的な学習としての忍者体育〉

岩井の忍者体育ついては、体育における基本の運動との関連で小林がすでに取り上げ、体育的観点からいくつかの重要な指摘をしている。[14]

例えば、一年生の水遊び「プールで忍者ごっこをしよう」という単元の授業で、幼稚園の頃は怖くて水に顔をつけられなかった子が、教師の「忍法水遁の術！」という声で、パッと頭まで水に潜ったというエピソードが生まれたこと、「子どもたちに工夫させる授業を成立させる前提条件は、教師が子どもたちの工夫に心から感動する純な心を持つこと」などである。また、子どもによる示範は岩井の授業では、『忍法金縛り！』という合図で子どもたちにその場で運動を中断させ、巡回指導中に何度も行われていた」と述べている。

このような指摘は、幼児教育の立場からもとても興味深いものである。幼児の運動指導では「イメージ化」が不可欠な要素であることを筆者はすでに指摘している。岩井の軽やかな動き、一人ひとりをよく理解した上での援助、イメージ化にも現されている豊かな発想力は、豊かな授業の重要な要素と考えられる。

奈良女子大学の附属小学校の実践には、大正自由教育をリードした木下竹次主事の「生活即学習、学習即生活」の考えに基づいた「合科学習」による教育の伝統が引き継がれている。したがって、岩井の一年生の「けいこ」の授業である“忍者の体育”も、当日の研究会資料の中で、総合的な学習として位置づけられている。資料にはその理由が次のように述べられている。

・子どもの思いや願いを生かしながら、身体表現活動を中心にして、各種表現活動を幅広く統合して進める。
・運動生活を基盤にした学級づくりを行うことで身体活動と健康についての理解と実践を一体的に学習する。
・子どもの意欲の連続を図り、子ども一人ひとりが自分のペースで、思い切り・思い通り・思う存分、自分を発揮できる学習生活をつくる。
・一律・一斉的に決まったことを教えたり、一つの方法や考え方で指導したりするのではなく、子どもが自分なりに問題を見つけ、工夫し、確かめ、喜びを持って学習を進める。
・仲間と協力・協調して、お互いに助け合い、尽し合って生活していく学習を、実践を通して進める。

“忍者の体育”は、岩井の言うように、[15] 運動種目を課題として与えず、「子どもがやりたい」と思い、「やってみよう」と自分で取り組み、多種多様な動きを工夫してつくり出す、子ども中心の生き生きとした体育学習を総合的につくろうとしたものである。つまり、子どもが自分なりに問題を見つけ、工夫し、確かめ、喜びを持って学習を進めることを大切にしているのである。

「やってできるようになれば子どもは喜ぶのだから、教師は、できるようになる指導の技術を身につけるべきだという人もいるが、外から強いられた喜びや、大人のスポーツを真似させて、教えて鍛えることが、子どもの生涯の健康な運動生活を作らせる体育の道なのかどうか、考え直したい」[15] という言葉に、忍者体育の実践のねらいが端的に示されている。

2）身体表現活動を中心にした総合的な学習

このような授業を作り出している岩井への、「幼稚園や保育園でどのように子どもが育ってきてほしいか」という質問で、岩井は次のように回答している。

「一年生は落ち着きがないものだ。それは興味や好奇心でいっぱいだからである。気になるのはきちんと話が聞けなかったり、教師の指示通りに動けない子どもではなく、自分を十分に表現できてこなかった子どもである。絵を描くことでも動くことでも上手下手を気にしたり、十分に遊んでこなかった子どもは、私の授業ではとまどったりすることが多い。自分を表すということが多いから。保育園や幼稚園で子どもの心を閉ざすような保育が行なわれることの方が問題。もっと自由に自分を表現できるようにすることが大切。したがって、附属幼稚園から入学した子どもについては問題がなく、あまり幼・小の連携ということについては問題意識はもっていない」

一年生は朝の会などで声を出す機会を多くする。繰り返していると次第に声が出るようになる。変身ごっこなどで自分のなりたいものになるなど、岩井は低学年の子どもにとっては教科の枠など関係なく、総合的な単元学習で指導することが好ましいと述べ、低学年の教育を、「広い意味での表現を育てる教育」[16] としてとらえる。それは、子どもたちが鋭い直観力や直接表現力を持っているからであり、知的理解を深めさせるにも、教室の話し合い学習と、身体表現とを一体的に学習させることが極めて有効だからである。

言葉ではなかなか表しにくいが、岩井の忍者体育の内容はどのようなものであろうか。表1は子どもが生きる“忍者の体育”学習の2年生の単元・題材を示したものである。この中の三学期の題材を例に上げて、具体的な授業の展開を示したのが、次の①から⑨である。

第一次

①忍術村をつくって、自分の忍法を見つけよう。（1/13）
②六つのコースの修行ができるように、忍者になってすばやく動こう。（1/29）
③それぞれの場所で、いろいろな忍法を工夫しよう。（2/5）

第二次

④順番や約束を守り、三人組みで力を合わせて、息がハアハア、心臓がドキドキする修行をしよう。（2/8）
⑤自分の忍法を工夫し、次々と新しいやり方を見つけて修行しよう。（2/12）
⑥自分なりの動きを高め、三人組で励まし合って力いっぱい続けて学習できるようにしよう。（2/15）
⑦自分のめあてを持って、できないことにも挑戦したり、反対の動きを工夫したりして修行しよう。（2/22）

第三次

⑧やってよかった、本当に楽しかったと満足できるように、自分の忍法を工夫して修行しよう。（2/26）
⑨豆忍者修行でできるようになったことを、たくさん忍者の巻き物にかけるように修行しよう。（3/1）

図2は、第二次の時間の学習環境図である。

表1　子どもが生きる「忍者の体育」学習の単元・題材

H.13	2　年		学級の取り組みと学校の体育的行事
一学期	総合的な学びを育てる新豆忍者修業	忍者リレー ④	・大型忍者屋敷の製作 ※春の運動会（4月） ・ダンボール箱迷路のトンネル製作 ・学級ミニ遠足(1)〈フィールドアスレチック・温水プール〉 ・学級ミニ遠足(2)〈温水プール〉 ・忍者の巻き物づくり(I) ※夏休みのプール水泳練習 ※プール水泳納めの会（9月） ・忍者の巻き物づくり(II) ※親子でふれ合う“秋味ハイキング”（9月） ※秋の大運動会（10月） ※秋の遠足〈甲賀の里・忍術村へ〉（11月） ※歩走練習（12月…7日間） 〈2年生…練習日2.4k、納会日3.8k〉 ・学級ミニ遠足(3) 〈耐寒遠足…春日山原始林へ〉 ※アイススケート教室（2月） ・忍者の巻き物づくり(III)
		新豆忍者修業 －ダンボール箱迷路の巻－ ⑩	
		プール水泳の忍法づくり ⑱	
二学期		走れ！走れ！豆忍者 ⑥	
		運動会のおけいこ （忍者リレー・ダンス表現） ⑨	
		目まい・バス酔いに強い体 ③	
		的当てボール忍法 ①	
		なわとび忍法 ②	
三学期		学習の里・忍術村の豆忍者修業 ⑨	
		なわとび忍法 ②	

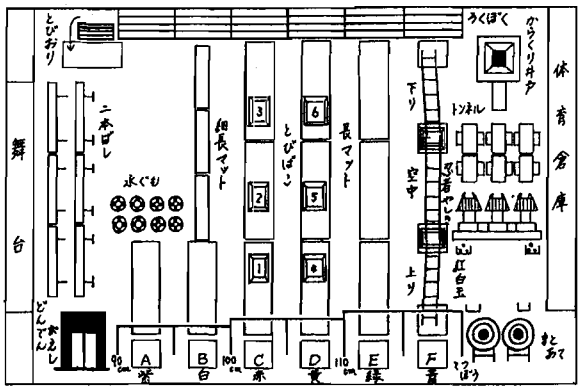

図2　学習環境図　（第二次の分…体育館）

この“忍者の体育”の授業を子どもたちはどのように受け止めているのだろうか。

＜一年生の子ども＞

「先生は、ぼくたちにいろんなにんぽうをかんがえさせてくれるからたのしいです。どうぐがたくさんあって、にんぽうがみつけられるのでたのしいです。じぶんでどのようにしたらいいだろうと、かんがえることがべんきょうになるとおもいます。」[17]

＜二年生の子ども＞

「今日は、忍者になりきって書きます。まず、てっきょうばしごでござる。おちてはならんぞ。

次は、いど。水の中へ行くのだから、いきをとめないといけないでござる。

水ぐもは、足のかかとがダンボールにあたっていたい。でも、がまんがまんでござる。

一本ばしは、おちないようにすばやく走るでござる。岩井黒忍者にそくてんをほめられた。もっとうまくなりたいでござる。今日は楽しかった。今度もがんばるでござる。」[18]

とユーモアたっぷりである。

＜四年生の子ども＞

「忍者体育は、自由な体育です。体が自由、頭も自由、心も自由です。この体育のいいところは、どこまでもゆめが広がっていって、終わりがなく、思うままに動けるということです。－ 中略 － 何をやると決められてやるのではなくて、自分で考えて、自分でためす、というのがふつうの体育との大きなちがいだと思います。私がこれからやってみたい忍者体育は、二人組、三人組など、グループをつくって、みなで知恵を出し合って、一つの忍法をつくりたいです。」[19]

四年生で岩井の体育の本質がよく捉えられている。

＜卒業前の六年生の子ども＞

卒業する前に　発表　花岡芙喜子

「坂本さんは、<u>岩井先生だからこそできた忍者体育</u>〈下線　筆者〉をとてもうれしがっていました。私も、忍者体育ができて、とてもうれしかったです。大方君は、忍者体育で、つくる・考える・発明するということを学んだと言っていました。私も、その考えに同感です。たとえば、エジソンが電球をつくるために、つくって、失敗し、考えて、やっとのことで発明できたんだと思うからです。」[17]

以上のような子どもたちの感想から、“忍者の体育”には、思う存分に動くこと、自分で動きを考えたり工夫したり、新しい技に挑戦する楽しさがあること、またそうした楽しい遊びの中で、子ども達が自分で次の課題を見つけ挑戦するという主体的な学びを確かなものにしていることをよく知ることができる。

“忍者の体育”の授業を実際に参観して、岩井がねらいとするように、子どもの動く意欲を引き出す環境づくり、多様な取り組みを可能にする発問や助言によって、どの子どもも生き生きと自分の課題に取り組む様子がみられた。岩井の「忍者体育」に関する著書は英訳され、優れた実践として外国にも紹介されている。

これまで述べたいくつかの実践事例に基づいて考えれば、小学校低学年の授業を、子どもの発達の特性に相応しい形で追究していけば、幼・小連携の道が自ずと開かれるのではないかという仮説が推定される。

もちろん幼稚園や保育園の側においては、今一度このような見通しにおいて、保育を見直す必要があろう。運動的な活動は、派遣されてきた専門の体育指導員にまかせていて、まるで体操教室やサッカークラブのような指導が行われている園も少なくないからである。逆に、ただ子どもの好きなようにさせておくだけといった放任保育になっている場合もあり、どちらも問題である。

幼・小の連携においては、有馬の実践で明らかにされたように、幼稚園、保育園、小学校の子ども同士、

教師・保育者の交流、互いの学び合いが不可欠であるが、[11] まずもってそれぞれの場で、子どもの側からの保育、教育というものをしっかりと確立し実践することが大切である。そうでないと、「多年知識を一方的に教え込む教育を転換し、自分で学び、考える力や実践力を育てる方向へと、発想の転換が叫ばれ続けてきたにもかかわらず、教育の現状にあまり変化がみられなかった。小手先の改革を何度くりかえしても、現実は変わらないのではないか。」[18] という危惧にもあるように、かけ声倒れに終わってしまう危険性もある。その意味で、教育内容や指導方法といった視点からの研究を今後さらに深めていくことが必要であろう。

＜おわりに＞

幼稚園教育要領で示された理念に基づいた保育の展開と、小学校低学年の子どもの発達に合った総合学習的な授業に幼・小連携の一つの解決の方法を探ってきたが、このような試みに関してもいくつかの問題点が挙げられよう。

① 幼児教育においても、「自由に」ということが保育者によっては放任になってしまったという経緯がある。こうした教育の場合、教師と子どもの信頼関係がしっかりとできているかどうか、子ども理解がどれだけできているか、子どもの発達が把握でき見通しをもった援助ができるかどうかによって、大きく左右されると考える。[注1)]

② 苅谷の「不利な社会経済的環境におかれた社会階層やマイノリティの子どもたちにとって「子ども中心主義」の教育がふさわしいのかどうかについても検討する必要がある。」[2)] という指摘にもあるように、子どもの実態をふまえた柔軟な対応が必要である。[注2)]

③ 幼・小連携を教育内容や指導方法といった視点から考察したが、秋田[20] のいうように、教員免許の併有など制度的な改革とも連動させていく必要があると思われる。いずれにしても、まず心を開いて互いに呼びかけ合うことが連携の第一歩となることは間違いない。

なお、本稿では、前述した世界各国での幼・小連携の試みや生活活動一般についてのつながりなどについてはほとんど触れることができなかった。これらについては稿を改めて論じたい。

＜注および引用・参考文献＞

注１）奈良女子大文学部附属小学校の研究会に参加して、先生が一人ひとりの子どもを実によく理解し、個々の子どもの課題をよく把握して適切な援助をしていることが感じられた。聞いて見ると、１年生から６年生までの６年間、２クラスを持ち上がりで２人の先生が担当する。子どもは３年生になる時に半数入れ替わり、４年生になる時にはこどもの方は替わらず、先生が替わるというシステムになっている。ドイツのバルドルフ学校（日本での通称シュタイナー学校）では、６年間通して同じ担任であったように思う。

注２）現地の新聞ではドイツのバルドルフ学校（日本での通称はシュタイナー学校）を「Freizeit für Speziälitat（特権階級のための自由）」というような見方があるという記事を掲載している。これと同じような批判は「きのくにこども学園」の学校に対してもなされているようである。

１）有田和正　“生活科との関わりをめぐる論点整理”「総合的学習をつくる」　No.120　P.30　明治図書　2000

２）苅谷剛彦　教育改革の幻想　ちくま新書　2002

３）藤田英典　教育改革　岩波新書　1997

４）鈴木正幸他　幼稚園教育課程の変遷に関する考察（１）―「遊び」と「幼・小連携」を中心に―　神戸大学教育学部研究集録　第83集　1989

５）二見　素雅子　スイスの幼児教育改革　「４～８歳の子どもの教育」を中心に　聖和大学論集　第26号　1998

６）赤星まゆみ　フランスにおける初等教育の一貫システム―保育学校と小学校の接続をめぐる問題―　日本保育学会第55回大会企画シンポジュームⅡ「子どもの発達の連続性を考える」―資料　2002

７）尾木直樹　子どもの危機をどうみるか　岩波新書　PP.215-222　2000

８）渡邊一夫他　幼稚園と小学校の連携について　弘前大学教育学部紀要　第86号　PP.51-60　2001

９）佐藤敦子　小学校一年生の指導から―学校生活での第一歩―　幼稚園じほう　29-9　PP.17-21　2001

10）布谷光俊　幼児教育から生活科、総合学習への課題　―幼・小間での相互理解、連携、発展を考える―　「せいかつか」　第6号　日本生活科教育学会　1999

11）有馬幼稚園・小学校、秋田　喜代美　幼小連携のカリキュラムづくりと実践事例　小学館　2002

12）岩井邦夫　みんなで楽しい忍者ごっこ　明治図書　1994

13）堀　真一郎　きのくに子どもの村　ブロンズ新社　1994

14）小林　篤　基本の運動としての忍者体育　「体育科教育」　1995.5

15）岩井邦夫　みんなで楽しい忍者ごっこ　明治図書　P11　1994

16）岩井邦夫　身体表現を生かした総合的な学習を「生活科授業を楽しく」　1995　6月号　明治図書

17) 岩井邦夫　　子どもへの働きかけをどうするか。「生活科と共に総合的学習を創る」1998.10
18) 岩井邦夫　子どもが生きる自律的な体育学習を「学校体育」　1998年　4月号
19) 岩井邦夫　学習研究　388　奈良女子大学文学部附属小学校学習研究会
20) 秋田　喜代美　　幼小連携への展望　幼稚園じほう　29-9　PP.5-11　2001